

1~3 節には、イエスが徴税人や罪人たちと共に食事をすることに不平を言っているファリサイ派の人々や律法学者たちに向かってこの譬えを話した、という著者による場面設定が記されています。4~6 節が譬えの本体で、羊飼いが 99 匹の羊を野原に残して、見失った1匹の羊を見つけるまで捜し回るのは、羊飼いは仲間と一緒に 100 匹の羊の番をしていました。ここでは「失う」の能動態が使われています。「羊が1匹いない！」と気づいた羊飼いは、「私が羊を失くした！」と感じたのです。そこで、直ちにその羊を探しに行くのです。このような状況ならば、なぜ羊が見つかって皆が喜ぶかがよく理解できます。著者の描くイエスは、「あなたがたの中に百匹の羊を待っている人がいて……」と、イエスとファリサイ派の人々や律法学者たちを羊飼いの立場に立ってみるようにと求め、招いているのです。見失った羊は罪人です。

それでは、イエスに遡るこの譬えはどのようなものだったのでしょうか。アメリカの新約学者 B・L・マック氏は Q 資料における譬えを「どう思うかね？ ある男に 100 匹の羊がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を残して見失った一匹を捜して回らないだろうか？ はっきり言うておくと、見つけたら、迷わずにいた九十九匹よりもその一匹のことを喜ぶだろう。」と考えています。

イエスの譬えを聞く人は罪人の烙印を押されて社会的に差別されていた人々を中心とするユダヤの民衆です。イエスは 99 匹よりも一匹が大切なのだと言っているわけではありません。見失った羊が他の羊であっても同じことなのです。神さまからみて、私たちは他の誰かと取り替えのきく一人ではなく、かけがえのない大切な命なのです。そして、神さまはその私たちをなお生きよと励まされているのです。私たちは勝手に自分のことを諦めてしまいますが、神さまは見つかるまで諦めずに捜し続けるのです。また、社会全体から疎外され、見失った羊のような存在に追いやられている人々をも神さまは見つかるまで諦めずに捜し続けるのです。そして見つけ出したら、一生に一度あるかないかのとてつもない喜びを表すのです。すべての人が神さまに大切にされ、かけがえのない人間であることを踏まえて、互いに神さまのもとにある人として愛し合うことが求められているのではないのでしょうか。この譬えのなかで、羊飼いの気持ちはいなくなった一匹の羊に集中しています。そしてその羊飼いがそれを見出して仲間とともに喜ぶその喜びは、その一匹が見出された喜びです。しかしその喜びの輪の中に、その一匹だけではなく、その一匹の仲間としての九十九匹もまた同様に招かれているのではないかと思うのです。